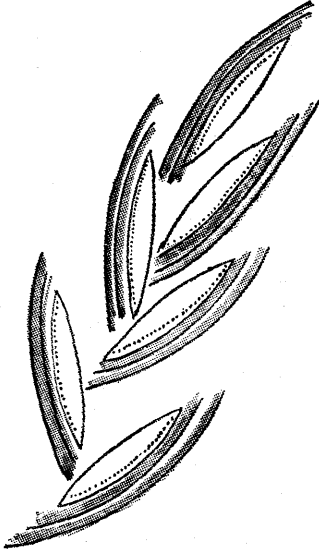


「すみかとしての幼稚園」

永倉みゆき



三歳児あか組の担任になって、泣く子をあやすのに精一杯で、あたふたと過ぎて行った四月、五月。泣き声の合唱も次第に小さくなってきた六月も半ばのこと。しゅんのおかあさんが私にこんなことを言った。

「先生、実は昨日ね。この子、幼稚園に行くの嫌だって初めて言ったのよ。今まで、一日おきに登園してのんびりしていたのが、このところ毎日になったでしょ。それまでこの子、幼稚園って、公園みたいなある日ぶらりと遊びに行く所だと思っていたみたいなの。それがやると、こういうところだってわかって、嫌だって言えたの

ね。それで随分すっきりしたみたいよ。」

その言葉は、私の考えをくると逆立ちさせるのに十分だった。それまで、私にとって彼は、附属幼稚園三歳児あか組二十名の中のしゅんちゃんという存在だったが、実はそうであってそうではなかった。ながさわしゅんという一人の人間がそもそも始まりであり、しゅんちゃんにとって幼稚園は、あくまでも彼が発見した彼にとってのものではないんだという当り前の事に、ここで私は、ガンと衝撃を受ける様な思いで気付いたのである。

一人一人の子どもの「個を大切に」とはよく言われるが、そういう殆んどお題目になってしまった言葉にはなかった生々しい重みを私は、この事実から受け取った。そして、それはそのまま、あか組の先生でいること——毎日、毎日、母と別れがたく泣き叫ぶ子を、何でこの私がひきさいて預からなければならぬのか——を、模索し始めた私にとって、ひとつの鍵になった。

幼稚園に受け入れる側である私達は、新人の子ども達

を迎える時、既に幼稚園というイメージを持っている。それと少しずれながら、母達もある幼稚園像を持って、子を送り出す。しかし、子ども、それも、生まれて三年少し、我が家をようやくすみかにし始めたばかりの子に、幼稚園なんて大きい固まりが、わかるう筈はない。また、その必要もない彼にとっては、出会ったものがそのまま幼稚園なのだから……。

そうしてみると、四月の始めから今に至るまでの、彼らが幼稚園を自分のものとしていく出来事をつなげることで、彼らにとっての幼稚園というものが、おぼろげながら見えてくるかも知れない。

そこで、これから試みとして、彼らの入園から今までの幼稚園との出会いと考えるものを、書き連ねてみることにする。

1 子どもが出会った幼稚園

(1) 自分のもの

はじめ、幼稚園は、彼らにとって自分の持ち物という形で現われる。新しい帽子、新しいかばん、新しい靴。初めて出かける幼稚園は、まず、この新しいものたちを自分のものにする、ということから始まるのではないかと思う。

帽子やカバンというと、私の心には、ひとつの光景が鮮やかに浮かんで来る。それは、四月の家庭訪問の時のことだった。二階にある自分の部屋を見せてあげる。ということ、階段を登って行こうとした時、廊下の隅の帽子掛に、まだ匂いも新しい帽子とカバンが、ちょこんと乗っかっているのが目についた。毎日の暮らしのにおいがしみこんだその家の中で、そこだけ違う風が吹いている様だった。目にしみるような真新しいかばんは、それゆえに胸踊らせるような嬉しさと、新しい世界への緊張感を表わしていた。それは、まるでこの子は、もう家にも包まれている子どもではない。と証し立てているようにも見えた。毎日、皆、こんな思いで身仕度をして家を出るのかと思うと、何か胸が詰まるような気持ちがあった

ことを覚えていた。

家においては、幼稚園の帽子とかばんは、その子にとって一番身近にある「外」である。それが、母親と一緒に登園している間にいつしか自分にとっての一番の味方にかわる。

子どもは、すてきなもの、新しいものを身につけて登園する時、会う人ごとに「いいでしょ。いいでしょ」と自慢気に言わずにはいられない。それは、童話の「ちびくろサンボ」よろしく、新しいものを持って嬉しい得意気な子どもの気持ちの素直な表われであると同時に、まだ十分自分に馴染んでいないものを言い立てることによって、自分のものにしようとする、不安な気持ちの表われでもあるように思う。

このように、幼稚園の象徴である自分の帽子やかばんはある意味で幼稚園というものとの出会いの第一歩であるように思う。家でなかなか朝の仕度をしないと、幼稚園でなかなかかばんを降ろさない。また、放りっぱなし、ということ、単にだらしがないとか、習慣が身に

ついでにないということではなくて、その子にとってかばんが——ひいては、幼稚園が、自分のものになりきっていない、馴染んでいないということの表われであるように思う。

次にあげるのは「自分のもの」をめぐるの出来事である。

(1) 夏休み中の登園日の帰りのこと、次々と母に迎えられて帰る子どもたちの中、ともやが母と靴を探していた。いつもならいくつかの出入り口を、あたれば見つかる靴が、なかなか見つからない。それもその筈、ともやの靴は、かよこが間違えてはいて、帰りかけていたのである。かよこが戻って来て、二足を見比べてみると、全くよく似た赤いリボンの絵が、マジックで描いてあった。突然かよこが火のついたように泣き出す。

「この子、どうしちゃったのかしら。」
と母は、途方にくれている。

「これじゃ、間違えるのも無理ないよ」

皆のなぐさめの中かよこは延々と泣き続ける。

かよこは、三才にしては、非常にしっかりしているように見える子だった。けんかの仲裁などもやっていたの、幼稚園というものを、いち早くのみこみ、よくわかって行動しているように、一見、見えていた。それが、実は大変な緊張感の上に成り立っていたことを、このことは示している。自分の印まで確かめて、自分のものと信じていたものが、実は、そうではなかった、という驚きは、彼女の表の顔を崩してしまう程だったのだ。「自分のもの」というお守りが、彼らにとっていかに重要か、この一件からも伺えると思う。

「自分のもの」は、自分の分身のようなものである。自分の持ち物を自分のものと、確信することから、彼らの幼稚園生活は、始まるのである。

(2) 自分のこと

(2) のぞみ、朝来るなり、靴箱の前で「のぞみちゃんね、きのう指切って、くしゅりちゅけてもらった」と、一息に言う、ついと指を私の前に差し出す。小さい指には、救急絆が貼つてある。

(3) スカート、エプロン、頭に冠と、めいっばいおしゃれをした女の子たちが、部屋の中を行き来している。その中のゆみこと目が合う。ゆみこ「あのね、あのね、ゆみちゃんみぎかかってもらった」嬉しそうに、両手を頭の後ろで組んではずんで言う。

(4) 朝、部屋の入り口まで、三輪車で来たともひこは、なかなか、そこから中へ入ろうとしない。そのうちかばんをしまったまま虫探しの仲間に入る。誰かが花をつむ。

「花より、ダンゴ」と急に、ともひこが明るく言う。
「パパは、花よりお酒」と更に、嬉しそうに続けて言う。

(5) ——— ももこの朝 ———

五月のはじめの日、いつもながらもこの朝は、涙で一杯のつらい朝だった。しばらくいてくれたお母さんが、別れがたさを振り切つて、「じゃあね」と逃げようにして、帰って行く。遊びから、ぱっと離れて「ママァー」と泣き叫びながら、夢中で後を追うももこ。私も後を追う。草むらから、フェンス越しに帰って行く母を見て「ママァー」と叫び続けるももこ。私は、このつらさの前には、何をすることもできず、ただ一緒に悲しい気持ちを感じている。何をすることもなく、草をつむ。すると今が今まで、泣いていたももこが、全く違う調子で「ゆうちゃん(小一の兄)きょう、がっこうに行つた」と突然言う。「ああ、そう」と私、草をつみ続ける。ももこ、何を思ったか、自分も、花をつみ始める。「ゆうちゃんにあげる」と言う。

子どもが、自分のことや、自分の家の出来事を語り始

める時は、唐突という印象を受けることが多く、受け手である私は、面喰らってしまう。一つの言葉、一つの物、或いは、何かの感じに突き動かされたようにして、そのことは、口元から流れ出す。このような、打ち明け話、とでも言いたくなるような話を、やや幼稚園に慣れつきはじめた五月頃からよく聞いた。

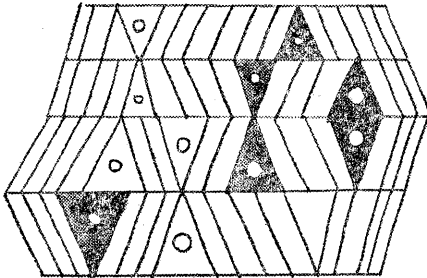
それは、あるものは(3)のゆみこのような、うれしさではじけんばかりの心から、洩れたつぶやきであったり、また、あるものは(2)ののぞみのように、家で起きた一大事を真剣に伝えようとするものであったりした。いずれも本人にとっては、胸の底にしまつてあった大事な喜びや驚きであり、(2)のような場合は、誰かにひと言いってしまったば、秘密の小箱の鍵は開けられてしまい、小さな秘密——隠すということではなく、自分だけが知っている。という意味で——の価値は下がってしまう恐れすらある。(3)のような場合でも、喜びの気持ちだが、そのまま受け取ってもらえるかどうかはわからない。それを敢えて言ってしまったのは何の力かと考え

れば、幼稚園に対する親しみの心の力だと、私は答えた。それは、幼稚園、または、その住人である職員の雰囲気だけから生まれたものではない。子どもの側から、幼稚園という場に対して、心を開いた小さなアプローチの一瞬なのである。(4)などは特に、誰に向けて言うというのでもなくつぶやかれた言葉であり、花を見て「花よりダンゴ」という愉快な語句を思い出し、その愉快さに促されるようにして「パパは……。」と家でも言っていて、笑い合ったのかもしれない言葉が続ける。それは聞いている者にも、暖かな一家団欒のひとときを思い起こさせ、心を和ませる。これら家について、自分について語られる言葉には各家庭の匂いがする。そして、それらは緊張で固くなっていた心の結び目が、ほっとゆるんだ瞬間にこそ語られ「話してごらん」と、促して聞いたものとは、全く質を異にする。

(5)のものもこの例では、さらにこの感を強める。母がいなくなつて泣いているもこは、朝、一緒に寝ていた母の暖かさがまだ残っているような母の子どもそのま

までである。が「ゆうちゃん、学校に行った」と、きっぱりと言うももこは、もう母の懐にはいない。幼稚園のももこ”になっている。だから涙は、もう流れていないのだ。このように自分の家のことを語るということは、母の元で甘えられるところである、自分の家を、語られるものとして対象化し、自分から切り離す事である。それは、ほんの一瞬ではあるが、自分について、また家について語るとは、自分や家を、改めて言葉で捉え直し、外から眺める作業ともいえる。

子どもが、そうやって自分の中から言葉を一つ一つ生み出して、語ろうとするのを、こちらも大切に受止めていく。そして、子どもはしっかり受け止めてもらえた満足感から、次の機会にも、また話したいと、言葉を探す。繰り返し、繰り返し語る中で、子どもは、自分や自分の家についての認識をはっきりさせていく。幼稚園とは、そういう幾万もの自分を、子どもが自ら見つける場、また、さらに新しい自分を生み出す場なのかもしれない。



(3) 自分の場所

幼稚園には、大人側で決めたその子の場所とというのが、いくつもある。靴箱、タオルかけ、ロッカー（カバン置き場とひき出しがある）である。それらには、名前を書いたテープの上に、その子のマークであるシールを貼ったものが、付いている。朝のタオルの交換は面白い。名ふだを一つ一つあたってみて、「見いつけた！」と大喜びする子、自分のものだけではあき足らず、他人のまで探してやる子、それぞれである。しかし、それも、幼稚園との信頼関係がしっかりと結ばれてこそそのことであって、そこが紛れもなくその子の場所になるのは、個人差こそあれ、ある道のりが要る。

(6) 初めての登園日は、母と一緒に過ごす一日だった。小人数で遊んだ楽しかった一日も終わり、帰りという時、見ると、のぞみの手に引き出しにしまった筈の着替え袋が、しっかりと握られている。「それは、

置いていくのよ。ここにに入れておけば、また来た時に、使えるのよ」と私とお母さんが交互に説得するが、のぞみは「いや」と譲らない。とうとう最後には持って来ただけの荷物をそのまま持って帰って行った。

のぞみに限らず、持って帰る、と言った子は何人かいた。のぞみは、このようなことを二、三回繰り返して、母の説得を聞き入れたのか、それからは、置いてくるようになった。しかし、登園後、母と別れがたく、置いていかれるのに怒って泣き続ける日々が、延々と続いた。この頃、のぞみは（以前はなかったそうだが）トイレの水を流す音を非常に嫌い、私がレバーを押そうとすると、慌てて、両耳を手でしっかりとふさぐ、ということをした。家でも、何でもない時に、突然「ぐらぐらする。（地面が）」と言って親を心配させた、と後から聞いた。今から思えば二月生まれの幼いのぞみにとって、新しい場、幼稚園は、捉えきれない、馴染みにくい場だったのだろ

う。自分の分身ともいえる、自分のもちものを、全く異質の空間に預けた上、大好きな母から離れ、見知らぬ子ども達の中に入れられる。トイレの水の音に対する怖がり様は、レバー一つで轟音と共に、自分の体から出たものを穴の中へと流し去ってしまう、得体の知れない水の流れに対する恐怖であり、それはそのまま、この頃ののぞみにとっての幼稚園の得体の知れないことと重なっていったのかも知れない。

ぐらぐらする地面というのも不安な彼女の心の表われであろう。その後、ある日突然トイレで、私が水を流してやろうとすると「のぞみちゃんがやる」と言い自分でレバーを押し、流れる水を、じっと見つめていたという出来事があり、それからはトイレの水の音が平気になっってしまったのである。いつとは言えないが、恐らくこの頃から、彼女にとって、幼稚園が少しわかりやすいものになってきたのかも知れず、朝も、いつまでも泣くということは、なくなってきた。

次に登場するけいいちも、なかなか自分の場所を信頼

できない人だった。タオル交換もカバンの中に入れてきた新しいものを出すのが嫌で、面倒臭さも手伝って、なかなか換えようとはしなかった。引き出しの中の予備の靴も、持って帰りたくて、帰りに何度か、押し問答を繰り返した事がある。そんなけいいちに驚くような瞬間がやってきた。

(7) 図書貸し出しの日、本は、一週間に二冊、手提げ袋に入れて、借りて行くことになっている。けいいちには、その手提げを忘れてしまった。かわりに紙袋を渡し、これでも借りられることを教え、そのまま他の子の世話に追われてしまった。貸し出しが終わり係の人たちを見送ってひよいと見ると、さっきけいいちに渡した袋が、そこに空になって飛んでいるではないか。さあ大変。本は、誰かが持って行ってしまったのかも知れない。

「けいちゃん、本がないよ。大変だよ。探そう」と言うとうと、けいいちは何言ってるの、という表情で「けい

ちゃんとここにいったよ」と言って「ほら」と引き出しの中を見せてくれる。そこには本が、ちゃんとする。私は驚いて「えらかったねえ。ちゃんとしたの」というと、ニーと自慢そうに答う。

なんと彼が、引き出しを自分のものをしまふ場所として使ったのである。あれほど信用のおけなかつた引き出しを、いつの間にか、自分の金庫として認めていたのである。それから彼が、急にどうなったということはない、相変らずのけいちゃんなのだ、彼は、ここに一步、大きな足跡を残した。彼にとって、うやむやだった幼稚園の中の自分の場所というものが少なくとも一つはつきりした。

以上、述べてきたように、子どもは幼稚園という新しい場と出会って、そこに新しく自分の居場所を見つけていく。次には、更に自分にとっての幼稚園を広げ、幼稚園の生活を積極的につくり出していく様子を挙げてみた

い。

2 子どもの手になる幼稚園

(1) しまいこむ

1 (3)で述べたロッカーが、その後どのようにして子どもの手に渡っていくかを見ようと思う。

(8) みかが「白い紙ちょうだい」という。私は絵を描くのかな、と思って手近な箱を探すが、くたびれたのが一枚見つかったばかりである。「こんなのしかないけど」と言うと、「あ、それでいいの」と喜んでもらっていく。そのことはそれで忘れていた。子どもが帰ってからふと見ると、みかのロッカーの上につきの紙が折りたたんで貼つてある。となりのもこの所には小さな紙のきれはしに、ももこ、と書いたのが貼つてあった。

ロッカーに自分の印を付ける、ということ、そのロ

ロッカーが自分の一部になったことを示している。その子の場所を見分けるための名札は単なる目印にしすぎなかったのが、みかやもこの手でみかやもこ自身の刻印を押されることで、ロッカーは真に個人的な場として生まれかわったのだ。

また、このロッカーは、秘密の守り箱としても機能する。

(9) 朝、ともひこがカニ好きのゆうじのために、さわがにを持って来た。昨日、二人で取り合ったとんぼを譲ってくれたお札に、ということらしい。ゆうじ、嬉しそうである。ところが、やにわにゆうじがカニをポリ容器に入れるとひきだしにしまう。ともひこが驚いて開けようとすると「ばかだなー。もし……見つかつたら……。」と、小さな声で耳打ちする。取られたら大変、というところだろうか。そのあと、二人は、何もなかったような顔でそこを離れて行く。

幼稚園は広く、大勢の子が住んでいる。今、自分が手にしている宝物も帰りまでちゃんとある、という保証は無い。ひきだしは、そんな時、絶対離したくない宝物の隠し場所にすらなってくれる。(9)では、引き出しは、二人の秘密を分かちあう仲間となり、心強い味方、守り主ですらある。

子どものひき出しを開けると、いろいろな顔がある。そこで見つけられるもの——こっそり集めた牛乳びんのフタ、作りかけの折り紙、きれいな紙切れ、リボン、本当は返さなくてはいけないはずのスカート、ブロック、カセットテープ。どれも、どこにでもあるようなものでありながら、どれ一つ交換できるものは無い。このひきだしの中身が雑然としてくれればくる程、その子の幼稚園生活が豊かになってくるともいえる。

こうやって、子どもたちは石ころからスカートに至る幼稚園の楽しみを、自分だけの秘密の場所に隠すことで、それらの遊びをより自分のものにしていく。そして同時にそれらをしまう場所であるひきだしをもまた、自

分の一部にしていくのである。

(2) 探し出す

あかぐみの部屋には、謎を秘めたしまい場所が二つある。一つは一角を横に仕切って、二階にしてある、ままごとの小部屋の下の間である。ここには、今は使われていない木の箱に入った昔の積み木のようなものが何箱か入っている。もう一つは、入り口を入れてすぐの右手にある、カーテンで目隠されたものおき(用具入れ)である。この二ヶ所はどちらも狭く、ごたごたしているのに、不思議に人気の場所だ。と言っても、特にここでこんな風に遊ぶのを見た、という訳ではないが、なぜそうわかるかと言えば、殆んど毎日のように、その奥から出てきたらしい木づちやら棒やらが、部屋の隅で見つかるからである。こんなこともあった。

(10) 殆んどの子がプールに入っていた、おやつ後のひととき。私が部屋をのぞくと、ともやとひろゆきが古くなって色もはげかかった積み木で何かを作って

いる。ともや「いいしょう(静岡の方言。いいでしよう、という意味)。ぼくが、これみつけた」と言う。これはものおきの奥にしまっておいたものである。しばらくの間、遊んでいた。

しまいこむ一方で、子どもたちは部屋の奥にあったものを、引き出してくる。今度は幼稚園は秘密を守る仲間ではなく、奥底まで調べられる相手である。こうやって子どもたちは次々と文字通り隅から隅まで、幼稚園を征服していく。

3 すみかとしての幼稚園

以上のように、入園してからの約半年を振り返ってみると、子ども達が、思いがけずに成長しているのに驚かされる。頑固にその子のペースを守りながらも、少しずつ、附幼子どもの家の一員になりつつあるようだ。そしてそれは言ってみれば、その子が幼稚園と出会うことで、自分や自分の家を捉え始め、新しい環境の中で、徐

々に、徐々に自分の世界を納得しながら広げていく、という事なのではないだろうか。そして又、そこはその子が社会的に一人立ちする最初の場であり、これから何度も繰り返される、見知らぬ場で、自分を出す、という初めての試みの機会である。子どもは最初は何の関係もなかったよその場所に自分の場をつくり、ぼつりぼつりと自分を語り始め、好きなものを見つけ、秘密を作り、やがてそこを足がかりにして、仲間の中へと飛び出して行く。幼稚園は、恐る恐る踏み出す一步を暖かく受け入れる場であり、何かを教えられて身につける場というよりもむしろ、もっと生々しい生活の場、ひとの匂いのする住み家なのである。そこには、遊ばせるための遊具より、もっと以前に、子どもを安らいだ気持ちにさせる、子どもにとっていこえる場が、なくてはならないのだと思う。

すてきな仲間が待っていて、

部屋を開ける鍵は

いつも

ぼくのポケットの中

(静岡大学附属幼稚園)

すみかとしての幼稚園

そこには、ぼくの場所があり